

受講番号 19020 学校名 高知追手前高等学校 氏名 本田 智砂

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年2H 生徒数 40名
 科目名 英語 I 単位数(授業時数) 4 時間 使用教科書名 PROMINENCE English I(東京書籍)

クラスの様子・特徴

男子15名、女子25名の文系クラス。生徒は素直で真面目であり、学習態度も良好である。一方、男女ともおとなしく自己表現が極端に少ないため活気に乏しい。話すことに興味は持っているが、音読の声も小さく声を出すことに消極的である。

問題の確定

授業中に使用する英語(インプット)の量が不足している。英語が使えた、理解できたという達成感をもつ持たせる必要がある。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
授業はほぼシラバスどおりに進められている。生徒の約74%がしっかり～おおむねしっかり予習をしているが、個人差があり理解度にも差が出ている。「授業内容がよく理解できているか」の問いには95%がしっかり～ほぼしっかり理解できていると回答している。	6月実施のアンケートでは、約95%の生徒が英語に意欲的又はおおむね意欲的で、授業に集中していると答えた生徒も92%いる。スタディサポートでは英語が得意24.3%、苦手22%であったが、アンケートでは英語が好きという生徒は42%になっている。	・英検取得状況 2級…1名(今年7月合格) 準2級…1名 3級…14名 4級…11名 ・進研模試偏差値7月→11月 68以上…2→3名 60～67…3→3名 54～59…3→7名 53以下…31→26名

リサーチ・クエスト

英語運用力の向上とそれを意識した授業の実践
 —インプットの量が増え、生徒に負担感を与えず、モチベーションアップにつなげるにはどうしたらよいか—

仮説・実践・検証

仮説1	実践1	検証1
授業の雰囲気作りに努めるため、クラスルームイングリッシュを増やす。英語の音に触れる機会を増やせば、「聞いて覚える」「文脈で判断できる」力がつかろう。	授業開始(号令なし、英語による挨拶)から、毎時間行っている英単語小テスト(「システム英単語Ver.2(駿台文庫)」以下「シス単」と略す。)及び採点まではクラスルームイングリッシュを使うようにした。英語を使う場面を多少増やした時期もあったが、実践は十分とは言えなかった。	夏休み明けくらいから英語での挨拶がマンネリになってしまい、かえって雰囲気を重たくしてしまった。結果的に、9月中旬あたりから通常の号令に切り替えた。授業の雰囲気作りが上手くいかなかった原因としては、毎時間シス単テストがあるため、生徒の関心はそちらにあって、単語帳からほとんど目を離さないような状況があった。
仲間どうしの教え合いや励まし合いを通して、仲間とともに伸びていくという意識が出来れば、もっと意欲的になり、モチベーションアップにつながるだろう。シス単のテスト用紙は表裏8回分が印刷されており、採点時に英語のコメントを加えるようにすれば、毎日のようにそれを目にするだけで、もっとやる気ができるのではないか。	隣どうして採点し、繰り返し目にするテスト用紙にencouraging commentsを英語で書かせるようにした。10点満点中8点以上の成績には何らかのコメントがもらえる。また、教師が解説する前に、自分たちで答えを確認させる時間を設けるようにして、仲間どうしの教え合いを奨励した。「fast learnerから習うほうが、教員が教えるより効果がある」というアイデアを取り入れた。	シス単のクラス平均(10点満点)の推移は、4～6月 8.5 7～8月 8.8 9～10月 9.2 11～12月 9.6と着実に成果が上がった。アンケートでも、64%は負担感が全くあるいはあまりないと答えている。実際にはあるはずなのだが、ARの効果なのか、教師の叱咤激励によるものなのか、クラス全体に高得点を取りたいという雰囲気ができ、実際に成績も向上し、またやる気が出るという良いバイラルが生じた。
まとまった時間を割かなくても、断片的にフォニックス指導を導入することで、音と文字との連結を意識しながら、単語からフレーズへ発展させていけば、音読の声が大きくなるのではないかと。また、語彙力の向上にも役立つのではないかと。	単語からフレーズへの発展については、システム英単語の次時の範囲を音読する際に、AR以前は単語だけを読んでいて、AR以後「ミニマルフレーズ→単語」のレポートを行い、フレーズに意識を向けさせた。	昨年の実践に、フォニックスは音読の表現力に対しての即効性はあまり期待できないとの報告があったが、当初はフォニックス指導を導入するべく、参考図書も2冊購入して準備をしていた。しかし、実際は配当時間の中で時間を割くことができず、実行は断念した。「ミニマルフレーズ→単語」の音読は負荷が大きいため、かえってリピート音読の声が小さくなるが、精度・完成度の高いフレーズなので、続けられれば効果は高いと思われる。

研究の成果

シス単の成績・取り組みに関しては、着実に成果が上がり、それなりに満足できる結果となった。生徒もやればできるという喜びを感じることができ、よいサイクルが生まれたと思う。「熱意や意欲があるか」の問いに対して、非常にあるという生徒が10%増加して49%となったが、一方あまり～全くない者も15%(6名)おり、全般にばらつきが見え始めている。授業が理解できる又はまあまあ理解できる生徒は9割で、英語 I の授業で扱う量や試験範囲は多いと感じているものの、「しんどいけれども何とかわかる」という状態だと思われる。

今後の授業改善の課題

具体的数値で検証できたものもあるが、意識の変容やモチベーションの高まりといったものを量ろうとするのは難しいと感じた。仮説の設定を適切に行う必要があるだろう。今回の研究の背景には、本校の「受験を通過点とした英語力の育成」ということがある。今後は普段の積み重ねが真の実力に反映するよう、一層いろいろな工夫を講じていかねばならないと感じた。

リサーチについての問合せ先: 職場電話 088-873-6141 電子メール